

親子関係の規範意識と実践意識について*

—その社会的要求性との関連—

東京都立大学

大 石 明 子**

戦後の家族法改訂に伴ない、新しい家族道徳規範は個人の尊重・男女の平等を重要視する法的拘束を一様に国民に与えている。しかし、この家族道徳規範は、制度として、いわば、突然に与えられたものであつて、ただちに国民の生活に浸透しうるものではないだろう。個人がそれをどのように受け入れるかは、その人の年代・性・生活条件等を異にすることによつて、さまざまであるかもしれない。また、同じひとつの家族集団においても、年長者と若い世代とでは、こうした家族規範の受け入れ方がちがうかもしれない。

そこで、この家族規範がどのように個人に受け入れられているか、また親子関係の現状はどうかを分析し、親子関係における諸問題を科学的に操作していく方法を見出すことが必要となつてくる。

本研究では、まず、親子関係に関心を多く寄せておられる心理学者を判定者として、親子関係の“よしあし”を測る刺激尺度の作成を試みる。ついで、その尺度に基づいて、人びとがどのような親子関係を“よい”と考えるか、あるいは、どのような親子関係を“わるい”と考えるか、また、かれらが実際にはどのような親子関係を営んでいるかを、年代別・性別・親子別に検討する。結果の解釈にあつては、Edwardsらにより、最近、活潑に研究されている“社会的要求性”(Social Desirability, SD と略す)との関連を考察する。

さらに、ここで扱う問題と関係系の理論***との関連を考えてみる。関係系の問題は、ほとんどすべての心的

現象に関するものであるが、具体的な研究は現在のところ主として知覚の領域に限られている。そこでは、知覚特性を決定する関係系を、多方面から分析し、明確にしそれが心的現象の説明原理となりうるかどうかについて検討しているが、徐々にその妥当性の確証を得ている(13, 14, 15, 16)。

さきに、われわれは社会的判断あるいは態度における関係系の研究(17)を試みたが、今回は、親子関係についての意識における関係系の問題をとりあげ、この領域における関係系に関する一資料を提供したいと考えている。

こうして、人びとがどのような親子関係を“よい”としているか(それを規範意識と名付ける)、また現実の親子関係をどうとらえているか(これを実践意識と名づける)、両意識の関係はどうかを検討していくことが本研究の主眼である。

I 判定者として心理学者を用いての刺激尺度構成

A. 方 法

親子関係のあり方をあらわす文章を家族関係に関する諸文献(18, 19, 21)から収録し、意味のあいまいなものを除きながら、112個の文章を選んだ。文章の形式は一般の態度調査にみられるような、いわゆる態度をあらわすものではなく、単に親子関係のあり方を記述したものである。たとえば、「親子は互いに相手を一個の人間として認め尊重し合うべきだ」というのでなく、「尊重し合う」という形式をとつた。これは規範意識・実践意識とともに同一の刺激尺度によつて評価したいという配慮からである。

判定者は、ことに家族関係に関心を寄せておられる心理学者45名(男35名、女10名)。これらの文章を親子関係の“よさ”の程度に応じて、等現間隔法の手続きにより、9点尺度法(1もつともよい。……5よくもわるくもない。……9もつともわるい)で判定した。そ

* Ideal and real evaluations in parent-child relationship.

** by Akiko Ohishi (Tokyo Metropolitan University)

*** 関係系は≪心的現象のほとんどすべての領域において、どのような個々の形象も、それがその中に存在し、その中を動き、その中に場所・方向・量を有する領域に関係しており、その領域を関係系とよぶ≫(11, 12)と定義される。

の際、9つのカテゴリー全部を使うようにとくに教示した。

B. 結果

112個の文章おのおのに対し、45人の判定者により与えられたカテゴリー数値の中央値を算出して、その文章の尺度値とした。また多義性の指標として四分偏差Qを求めた。これらを尺度値の小さい方から順に並べてみると尺度値の巾は1.2から8.9に及んだ。尺度値の分布はTable 1に示すとおりであるが、112個のQ値の平均

は.83で、親子関係についてのこうした文章に心理学者

Table 1 各文章の尺度値による分類

尺度値の範囲	数	Q値の平均
1.0 ~ 2.9	28	.76
3.0 ~ 4.9	23	.96
5.0 ~ 6.9	26	.90
7.0 ~ 8.9	35	.71
総計	112	.83

Table 2 刺激文章、その尺度値、四分偏差値および提示順位

尺度値	Q	提示順位	文章
1.2	.45	8	親子は互いに相手を一個の人間として認め尊重する
1.5	.65	22	親子各人の生活を大事にしつつも統制のとれた集団生活であることを忘れない
1.7	.65	17	親子がともに考え心配し喜び合う
2.0	.85	5	親子がお互いに相手を誇りとしている
2.1	.65	29	親子が公平な愛情をもち、嘲笑や裏切り、失望を与えない
2.4	.80	15	親には親の、子どもには子どもの生活がある程度まで認める
2.7	.95	1	子どものやっていることに親がいつも関心を示す
2.9	.95	3	親子互いにこせこせした気持でなくあつさりにつき合う
3.1	.95	11	親子で争いが起つたらその原因を相互に十分究明する
3.3	.85	18	子どものやることひとつひとつについて親がやきもきしない
平均 2.3	.78		
3.5	1.05	28	親子が友人同志みたいであつても親は親としての威厳を保つ
3.9	1.05	30	親子は互いにはときには相手を批判的にみる
4.1	1.00	20	強いられなくても親子が同じような考え方をする
4.4	1.05	12	子どものやりたいことをやらせるにしても一言親に相談することを親が要求する
4.6	1.00	4	子どもが困っている時にのみ親は干渉する
5.0	.40	27	親子の間で理解しえぬこともある
5.2	.95	24	親子の間のことなど開き直つて考えることをしない
5.5	.75	21	親の心配ごととはできるだけ子どもにかくしておく
5.9	.85	25	親子の間はただ平穩無事でさえあればよいと考える
6.4	.85	6	親子は無条件に事理の是非・善悪を問わずに協力する
平均 4.9	.90		
6.7	.95	10	親が何をしようとしているか子どもにわからない
6.9	.85	2	自分の子どもが何を考え何をしようとしているか親が予測できない
7.0	.80	16	親子一体と考え各人の生活を認めない
7.2	.90	23	子どもに対してなによりもまず従順ということを要求する
7.4	.75	14	親子の間にいろいろな面で距離がありすぎる
7.8	.55	26	親子が話し合うことをせず泣き寝入りしてしまう
7.9	.70	19	子どもの活動は全面的に親が指定する
8.2	.70	13	親の意見に反対するとこわいので子どもは何でも親のいうとおりになる
8.6	.65	7	親子が互いをうとんずる
8.9	.35	9	親子が軽蔑し合う
平均 7.7	.72		

はかなり一致した評価を与えているようである。しかし個々の文章をみていくと、尺度の両極に近い文章は評価のばらつきが少なく、中央附近の文章はよりばらつきが多い（9点尺度法で.90以上）ことがわかる。ここでは112個全部の文章に対して与えられた評価をひとつひとつ検討しないで、ごく簡単に際立つ面だけを概述するにとどめる。

かれらが一致して“よい”と評価した文章には、「親子は相手を一個の人間として認め尊重し合う」、「互いを理解し」、「自主性を重んじ」、「信頼し合う」そこには「深い愛情の支えがある」などがある。

また逆に“もつともわるい”と評価された文章は、「溺愛」とか「愛情的接触が欠けている」といつた類のもので、「親が子どもを一方向的に従わせようとする」、「従わなければ、威嚇し」、「勘当してしまう」ような親子関係である。

また、尺度上ほぼ中央の位置を占める文章で、判定者が一致した評価を与えたものは、「親子の間でいつてよいこととわるいことがある」、「親の一存でことを決めなくてはならぬことがある」、「親子間で理解しえぬこともある」、「年をとつたら、子どもの迷惑にならぬよう養老院へ行く」のもよいが「住居さえあれば一緒に住む」などである。

C. 刺激尺度構成

以上の結果から、文章それぞれの尺度値、Q値、内容を参考にして Table 2 のような30個の文章からなる刺激系列を作成した。尺度値は1.2から8.9、数値の小さい方が“よい”親子関係をあらわして、これらの尺度値は以下のすべての調査における刺激尺度値として用いられる。30個の文章は尺度値の大きさの順に並べ、10個ずつに分けた。尺度値の小さい群を“よりよい親子関係”をあらわす文章群（“better”と略す）、尺度値の大きい群を“よりわるい親子関係”をあらわす文章群（“worse”）、残りの中間の尺度値の群を“よくもわるくもない親子関係”をあらわす文章群（“neutral”）という3群に便宜上分類した。これらの文章は権威・統制的な親子関係、情緒的結びつきの親子関係といつた範疇に分類しうるかもしれないが、一応ここでは“よい”、“わるい”“よくもわるくもない”親子関係の分類にしたがう。

II 調査の実施

A. 一般的手続き

こうしてできあがった30個の刺激文章からなる系列について、評価者は規範意識と実践意識の両方を表明するのである。規範意識の表明は、さきの心理学者に与えた

教示と同じく、もつともよい親子関係[1]から、もつともわるい親子関係[9]にわたる次元で、各刺激文章を9点尺度法で評価することによる。その際、9つのカテゴリ全部を使う必要のないことをとくに教示し、またカテゴリ間の距離が等間隔になるようにとの教示は与えなかつた。したがって、ここでの手続きは系列範疇法にしたがうことになる。

こうして表明された評価者の得点の中央値を“ISV”とよぶことにする。実践意識は、それぞれの文章に対し、自分の現実の親子関係が、どの程度その文章の表現しているものに似ているかを、まったくそのとおり[1]から、どちらでもない[5]を経て、まったくちがう[9]にいたる9点尺度法で表明することによる。

ここでの得点を“RSV”と名づける。文章の提示順位はランダムであるが、Table 2に示された順位は以下のどの調査においても一定である。データは規範意識・実践意識両方にもれなく回答したものについてだけを処理し、親子関係の3種の型（“better” “neutral” “worse”）ごとに、平均判断尺度値を求めた。

B. 結果

1. 年令別・性別にみた規範意識と実践意識

ここでは親子関係についての規範意識と実践意識を評価者の年令別・性別に検討する。評価者総数509名、年令・性についての内訳は Table 3に示すが、いずれも都会居住者で教育程度も比較的高い。その限りにおいて、評価者の文化的背景には大きな差を考慮しなくてもよからう。

(1) 規範意識と年令差、性差

“better”、“neutral”、“worse”の平均判断尺度値(ISV・RSV)を年代別に Fig. 1に示し、Fig. 2と Fig. 3には、

Table 3 評価者の年令・性による分布

年令*	男	女	備 考
16—17	115	63	大戦末期に出生
19—22	63	43	終戦時未就学
23—27	27	10	終戦時国民学校1～5年生
28—31	11	13	新制・旧制の交替
32—39	36	26	終戦時已に青年期にあつた人
40代	27	25	戦前・戦中に青年期
50代	30	20	戦時壮年であつた人
総計	309	200	

* 1961年10月現在

年代別・性別の ISV・RSV を示した。いずれも点線であらわしてあるのは、当該文章群の刺激尺度値である。“better”、“neutral”、“worse”それぞれの文章群にお

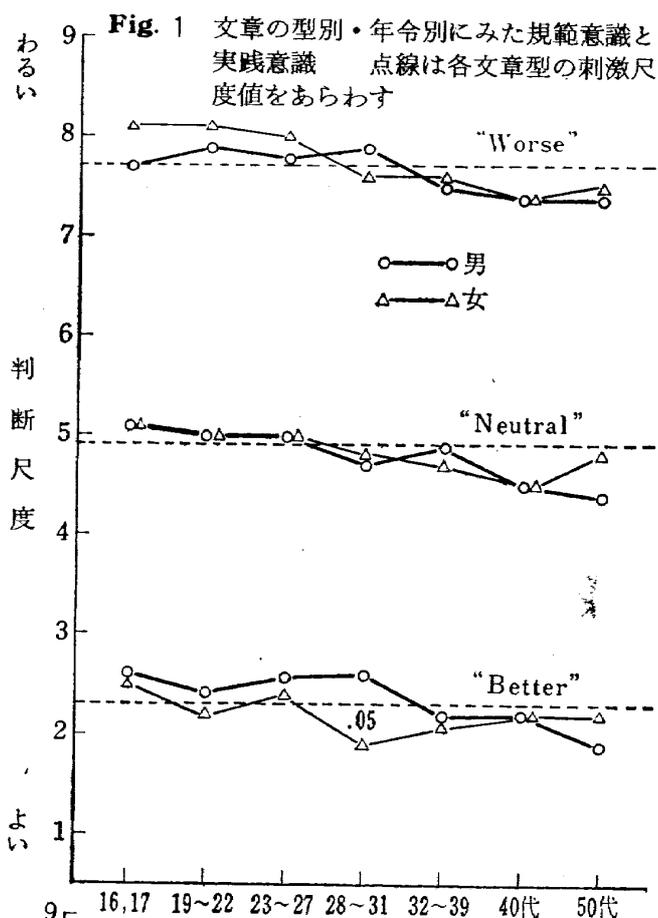


Fig. 3 文章の型別・性別にみた実践意識

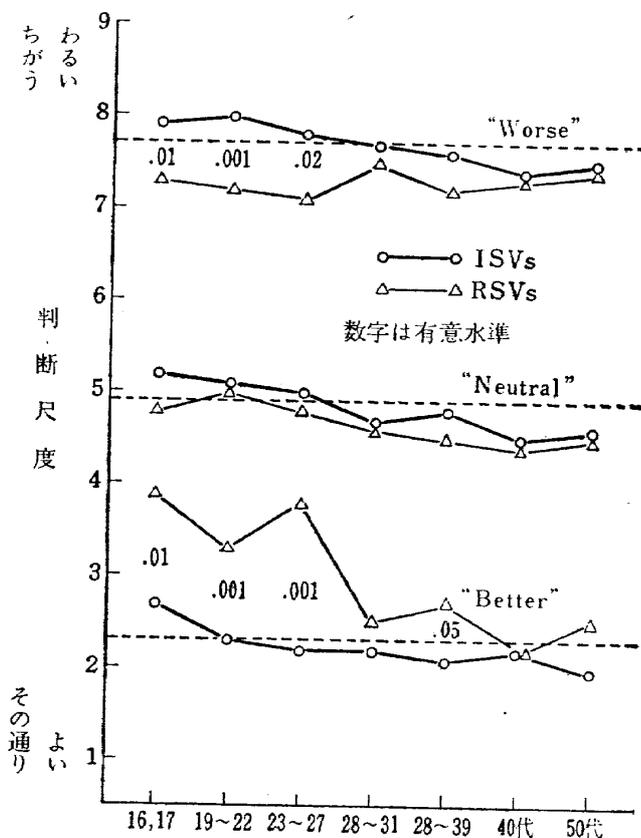
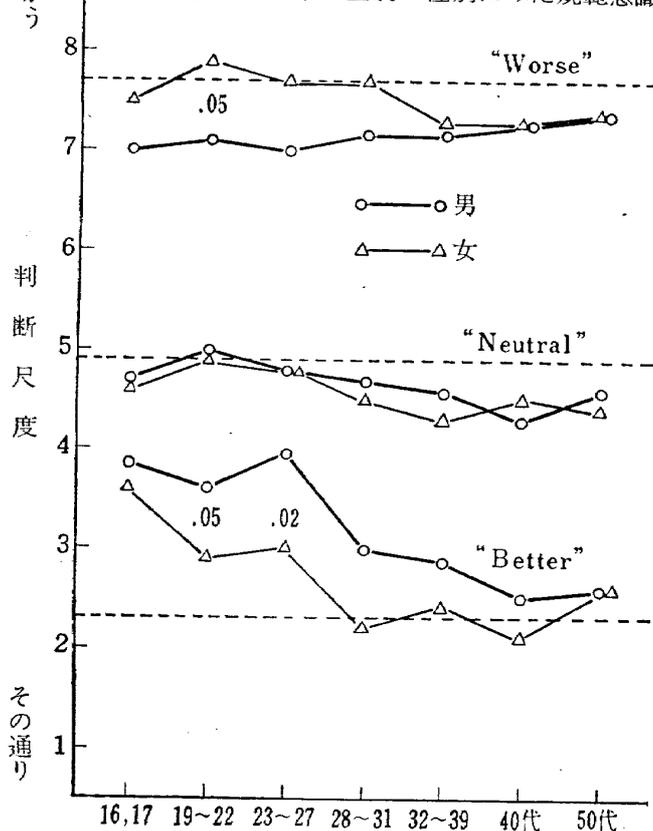


Fig. 2 文章の型別・性別にみた規範意識



いて、いずれの年齢層もきわめて類似した評価をしている。ただ全体的傾向としてみられることは、若い世代のISVが刺激尺度よりも大きく、32才を越える世代ではいずれも刺激尺度値よりもISVが小さくなっていることである。

個々の文章についてみていくと、「親子がともに考え、心配し、喜び」あつたり、「公平な愛情をもつ」たり、「お互いに相手を誇りとし」たりするような親子関係に対しても、また「親が子どものやつていることにいつも関心を示し」たり「親子が友人同志みたいであつても親は親としての威厳を保つ」たり「強いられなくても親子が同じような考えをする」、「子どものやりたいことをやらせるにしてもひとこと親に相談させ」たり「親の心配ごとは子どもにかくしておく」ような親子関係は、若くない世代の方が、「よりよい親子関係だ」という評価をくだしている。「子どもに対して従順を要求する」ことを40代の方は「どちらかといえばよい」と評価しているのに対し、若い世代は「わるい」と評価している。ここで、旧家族道徳規範においては、従順が徳目として重要視されていたことを思いおこしてみると、このような年代による評価のちがいが理解されよう。

しかし、ここで示された諸傾向はほんのわずかにのぞ

かれる程度のものであつて、年齢のちがいは規範意識に有意なほどの影響を及ぼしていないことが明らかになり、ここで選ばれた評価者を用い、またこのような尺度を用いるかぎり、規範意識にとつて年齢は重要な変数でないことが示唆される。

規範意識と性差に関しては、Fig. 2 にみられるように、どの文章群についても、どの年代においても(“better”について28—31才の男女の有意差があるのは唯一の例外)有意な差はみとめられず、性別も規範意識の重要な変数でないことが知られるが、これについては後述する。

(2) 実践意識と年齢差・性差

Fig. 1 にみられるように“better”でのRSVは年齢により、かなりの変動がみられる($F=12.8$, $df=6/63$, $P<.01$)、若い世代は刺激尺度上の親子関係と自分の現実の親子関係とを若くない人たちほど類似したものとみていないことが示された。“worse”, “neutral”では年齢差はみられない。

男女の実践意識は、Fig. 3 に示されるが、ここでも“better”については年代によりかなり変動がみられる。男女間を比較すると、50代を除いて、女性群の方が刺激尺度上で“よい”親子関係とされているものと自分の親子関係が類似しているとみており、また32才以上の人を除き、“わるい”とされている親子関係に対し、女性群の方が自分の親子関係と類似していないとみている。

(3) 規範意識と実践意識の関係と年齢差・性差

Fig. 1 から“better”では、28才—31才、40代を除いて、 t 検定の結果(以下の検定はいずれも t 検定)、いずれも有意にRSVの方がISVより大であることがわかる($df=18$ $P<.05\sim P<.001$)。“worse”では全般によりRSVの方が小で、ことに若い世代でその差は著しい($P<.02\sim P<.001$)。“neutral”では全般にRSVの方がISVより小ではあるが、いずれの年代についても有意な差はみられない。

そこで、ここにあらわれた規範意識の尺度と実践意識の尺度の巾を比較してみると、若い世代では前者の方がかなり広い。しかし28才を越えると、RSVはしだいにISVに近づき、尺度の巾は狭ばまつていく。この両者の値が近いということは、規範意識と実践意識との間に、ずれが少なくなることである。すなわち、規範意識がよい親子関係からわるい親子関係にわたる連続体上に占める位置と、実践意識が自分の親子関係との類似度を示す連続体上で占める位置とが対応し、“よい”と考えた親子関係に自分の現実の親子関係が類似し、“わるい”と考えた親子関係と自分の現実の親子関係が類似していな

いということである。

これを適応という面あるいは道徳の面からみれば、規範(理想)と実践(現実)が一致しているのは望ましいことである。しかしここに現われたように、若い世代は理想と現実が不一致だが、年輩の人たちは理想と現実が一致している、したがって適応がよく、また道徳的に望ましい状態にあると簡単に断定してよいだらうか。とくに現実の親子関係を、ここで用いられたような刺激文章に即して表明させる場合、社会的な規範に合致させようとする欲求がありのままの親子関係についての報告を歪めるようなことがないだらうか。この点に関しても後に考察する。

男性群について、規範意識と実践意識との関連を年齢別にみていくと、(Fig. 2と3の比較から)“neutral”ではISV・RSV間に差がないが、“better”, “worse”両群——ことに“better”——では両意識間にかなり差がみられる($df=9$, $P<.02\sim P<.001$)。

規範意識を示す尺度の巾は年齢によつてさほど変化しないが、実践意識をあらわす尺度の巾は年齢増加にともない拡がつていく。

女性群については、同じくFig. 2, 3との比較から、“better”において、若い世代は規範意識と実践意識の間に有意な差のあることがわかり、他は全般的にISVとRSVの差は少ないということが男性群と比較していえるだらう。

さきにも指摘したように、規範意識に関しては、性差による評価の相違がみられなかつたのであるから、ここで女性群の両意識のずれが少ないということは、実践意識が男性群よりも規範意識に近づいている、換言すれば、規範意識により強く影響されているといえないだらうか。

2. 親および子の規範意識と実践意識

ここでは、親の立場・子の立場からみた規範意識と実践意識を検討する。被調査者は東京都立大学附属高校2年生男女178名、その親142名である。内訳は男子生徒115、その父39、その母52、女子生徒63、その父21、その母30名であつた。父親の大半は専門学校以上の学歴、母親もまた女学校以上の学歴であり、しかも社会・経済・文化的地位はかなり高い。

親子揃つたデータ142対の中から、子どもについて、規範意識と実践意識のずれの少ない群(各文章について子どもひとりひとりのISVとRSVの差を絶対値でとり、30個の文章についての総計が30以下)を22対(L群と名づける)、両意識のずれの多い群(30個の文章での総計が60以上で、M群と名づける)を24対ぬき出し、この

両群について ISV, RSV を算出して比較分析した (Table 4)。

まず、文章の型別にみていくと、規範意識は、どの文章群についても、親子とも L・M群間に評価の有意な差はみられない。が実践意識は “neutral” を除き、親子とも L・M群間に有意な差がみられる (df=18, P<.05~P<.001)。また、M群についてみると、親子とも実践意識の尺度がかなり狭まっているのがわかる。とくに子どもにおいて、どの文章に対しても、自分の親子関係と似ているわけでもないし、似ていないわけでもないといった評価がなされている。

規範意識と実践意識の関連をLM群についてみると “neutral” を除き、M群では親子ともに有意な差がある (df=9, P<.02)が、L群では親子とも両意識間に差がみられない。つまり子どもの規範意識と実践意識のずれが大きければ、その親の両意識のずれも大きい。この場合、子どもの方が自分たちの親子関係をより望ましくないと考えている。また子どもの両意識のずれが小さければ、その親もずれが小さい。

Table 4 L群・M群のそれぞれの親子における規範意識と実践意識
(L群とは規範意識と実践意識のずれの少ない評価者からなり、M群とは、両意識のずれの多い評価者群である)

	L 群				M 群			
	ISV		RSV		ISV		RSV	
	親	子	親	子	親	子	親	子
“better”	2.4	2.9	2.7	3.1	2.4	2.4	3.4	5.0
“neutral”	4.9	5.2	4.8	5.1	4.6	5.1	4.8	4.7
“worse”	7.5	7.9	7.7	7.8	7.2	8.0	6.3	5.5

実線で結んであるのはその間に t 検定で有意差のあることを示す。

ここで示されたように、規範意識と実践意識のずれの大小によつて評価者を分類することができるということは親子関係の研究にひとつの方法論的示唆を与えるだろう。両意識のずれの大小、あるいは現実の親子関係についての親子の見方の相違はどのようにして生じたかを分析することが親子関係の問題へのひとつアプローチとなる。

ここで簡単に個々の文章に関し、規範意識をみていくと、親の ISV 方が子どもの ISV より大きい文章には次のものがある：

「親には親の、子どもに子どもの生活がある程度まで認め」たり、「親子が相手を批判的にみ」たり、「親子間で理解しえないこともあり」、「自分の子どもが何をしようとしているか親が予測できない」、「親子が互いをうとんずる」

これらの親子関係は望ましくないと親は評価するのである。

親の ISV が子どもの ISV より小さいものには次のものがある。とくに、L・M群とも親子の ISV に .5 以上のひらきがあるものを列挙すると：

「子どものやつていることに親がいつも関心を示す」、「強いられなくても親子が同じような考え方をする」、「子どものやりたいことをやらせるにしてもひとこと親に相談させることを親が要求する」、「親の心配ごとはできるだけ子どもにかくしておく」、「親子の間はただ平穩無事でさえあればよいと考える」、「親子一体と考え、各人の生活を認めない」、「子どもに対してなによりもまず従順ということを要求する」、「子どもの活動は全面的に親が指定する」、「親の意見に反対するとこわいので、子どもはなんでも親のいうとおりになる」

これらの文章に対しては、子どもの方が望ましくないと評価している。以上の結果から、親子のあるべきすがたに関する見方のちがいがうかがえよう。子どもの世代は、新教育により、ひたすら個人の尊重を学び、自由を学んだ。そしてかれらは、自分の親がわが子の拘束をするのは望ましくないと考える。これに対して、親の世代はできるだけ子どもを自分の注意力のとどく範囲内に入れておきたい、親のいうことをよくきく子どもにしたいとねがうのである。

III 考 察

以上 “よい” 親子関係、“望ましい” 親子関係とはどのようなものか、また “わるい” 親子関係 “望ましくない” 親子関係とはどういうものかに関して、年令・性の異なる評価者、親と子について検討した。それをわれわれは規範意識と名づけた。さらに現実の親子関係がどのような状態であるかについて、この調査にききだつて作成した刺激尺度にしたがつて評価させ、それを実践意識とよんだ。また規範意識が実践意識の表明にどのような影響をもっているかを検討し、その影響の受け方には個人差のあることをみてきた。

この親子関係についての規範意識は、ここで選ばれた

社会・経済・文化的に比較的安定している評価者においては、年代のちがいが、性のちがいが、あるいは親と子のちがいがいかかわらず、さほど変化しないことがわかった。常識的に考えて、従来の「淳風美俗の精神」を朝に晩に培われ、権威に対する絶対服従を教えこまれてきた世代と、個人尊重・個人の自由平等を規範とした教育を受けている若い世代とでは、おのずと現行の家族道徳規範の受け入れ方が異なるだろう。しかし、結果は、どの年代をとつてみても、男でも女でも、また親でも子どもでも、きわめて類似しており、年令・性・親子のちがいは規範意識についての重要な変数でないことがわかった。

これに対し、現実の親子関係についての実践意識は、年令・性あるいは一部の親子について、かなり変化を示した。このことから規範意識はそのままに実際の親子関係に反映されるものではないといえよう。たとえば若い世代や男性群は、みずから“よい”と評価した親子関係を現実の親子関係にもちこめずまたみずからわるいと評価した親子関係と自分の親子関係を切り離してしまふことができない。しかし、ここでいう実践意識が質問紙法によりとらえられたものであり、これから述べるように、ある歪曲がなされる可能性があるから、ここから単純に結論をひき出すことは早計であろう。

規範意識と実践意識のずれが、若い世代や男性群では大きいのに、年輩の人・女性群では小さく、ときには一致しさえしているのをどう解釈するか。年輩の人は規範意識と日常の親子関係がはたして一致しているのだろうか、それとも一致させようと意図して回答したのであろうか。親子それぞれの立場から評価した場合、ある人びとにおいては、親子間に有意な評価の差があるのはなぜだろう。親の実践意識か子どもの実践意識が歪められているのだろうか。

Bell(1)は、現在一般に流布している理論に肯定的な文章に対しては、評価者間にあまり不一致がないことを報告している。たとえば、「子どもはかれみずからのパーソナリティを発展させる自由を持つべきだ」という文章に対してだれが異論をはさめようかというのである。

このことは、ある人たちが親子関係の規範意識に逆らった回答を避ける傾向をもつことに関連する。たとい現実の親子関係が規範意識と非常にへだたつていたとしても、そう報告するのを回避してしまうかもしれない。もちろん、この規範意識に逆らった回答をしたがらないというのには個人差があり、それは個人の人格特性の中に数えあげられるものかもしれない。しかし、この規範意識にそのような実践意識を表明しようとする傾向はかなり根強いものであるようだ。

この点について、さらにまた、ここで見出された規範意識に年令差・性差の影響の少ないこと、および現実の親子関係についての評価と規範意識の関係を最近 Edwardsら(2・4・5・6・7・8・9・10・20)によつてとりあげられてきた“社会的要求性”という概念との関連で考察してみよう。

社会的要求性との関連——社会的要求性 (social desirability, 略して SD) についての研究はパーソナリティの分野でまずとりあげられた。数ある性格記述がそれぞれ社会的に望ましいものから望ましくないものへとわたる次元上の一位置を占めることができる。「親切的な」、「陰気な」、「忠実な」、「ずるい」、「やさしい」、「いやらしい」、「静かな」等々、性格を表現する形容詞は数えきれぬほどあるが、それらすべての記述を貫くにかひとつの次元があると考えるのである。Edwards(6)は、この単一の次元を社会的に望ましいこと——社会的に望ましくないことの次元、簡単にいつて SD次元とよんでいる。そしてある性格記述が、その次元上で占める位置と、その記述が自分のことを記述してあるのだとして選ぶ確率との間には、正の高い相関がある。つまり社会的に望ましい性格をあらわしている項目は、それが自分の性格をあらわしているといつて受け入れられやすくなり、社会的に望ましくない記述は受け入れられにくくなるというのである。

このことは、ひとり性格検査にとどまらず態度調査においてもみられることを Taylor(20)が指摘した。一般に用いられている態度尺度、たとえば、Authoritarianism Scale, Ethnocentrism Scale, PARI の Control Scale, Anomie Scale 等において、自分の態度をあらわしている文章を選ぶ確率と、その文章の SD 次元上で占める位置とは深い関係があるようだ。自己に対して社会的に望ましいという印象をもちたがる人は、社会的に望ましいと知覚する態度尺度上の文章だけを選ぶ傾向があり、こうした反応のセットが態度尺度上の得点に影響を与えるのだろうといっている。

Edwardsらの研究によれば、ある性格記述を SD 次元上に位置づけるのは、年令・性・社会・文化的背景を変えても非常に一致したものである。

Fujita(8)は Edwards の Personal Preference Schedule (PPS)(4)からとつた性格記述を用いて、在米日本人学生の SD 尺度値を求めたが、それと Edwards がアメリカ人学生から得た結果との積率相関は .95 であることを見出した。Klett(10)はやはり Edwards の PPS からの性格記述の SD 尺度値を社会・経済的地位の異なる被験者について求めたが、これらの群内に差がみられな

かつた。Edwards(3)は、年令差・性差とSD尺度値との関連をみたが、いずれも高い一致度を示した。これらから、年令差、性差、社会・経済的地位の差、文化の差といった変数は性格記述についてのSD尺度値に関わる変数としての意義が小さいと結論できる。

しかし、社会的に望ましい性格記述や態度記述を個人が自己のものとして受け入れるかどうか個人差があるのは先述のとおりである。つまり社会的に望ましい記述を多く自己のものとして受け入れ、望ましくない記述は拒否してしまいたがるような人と、そうでない人とに分けることが可能である。

これらの事実は性格検査や態度調査をする際に注意すべき点である。われわれが個人の性格や態度を測定するつもりでいても、実はそれぞれの記述のもつSDの程度を測定することになつてしまうかもしれないからである。さきにも述べたように、心的事象の個々の特性は、そのときどきの支配的な関係系によつて決まる。そこで、われわれがある記述についてある評価をしようとする場合、測定しようとする個人の実践意識のほかSDという別の系の効果が優勢になつて、個人の実践意識そのものが表面からかくされてしまうことが考えられる。

こうして、Edwardsが多くの性格検査における得点にSD次元上で論ずべき要因が入りこんでいることを指摘し、その要因をとり出してみようとしたことは意義深いことと思われる。実践意識の決定において、SDが強力な系の効果として作用することは、このSDに関する研究の必要性を示唆するものである。

さて、われわれの得た結果とSDとの直接の関連を考えてみると、われわれが規範意識とよんだものは、つまりSDなのだということに気づく。どういう親子関係がよい親子関係かという、それは直接には家族法に関心のない人であつても、教育・文化等の伝達機関を通じて知られている新しい家族道徳規範に合致した親子関係である。それゆえ、親子関係についての規範意識が、年令・性を変えても、心理学者の規範意識と異ならなかつたという事実は、Edwardsらの一連の研究結果と一致するものである。心理学者による規範意識がより公正に新しい家族道徳規範を示したものであるとすれば、こうした規範に抗して親子関係のあるすがたを表明しようとするのは、なかなかむづかしいことではなからうか。

規範意識と実践意識の関連についてみる場合、各年代ごとに30個の文章についてISVとRSVの列位相関を求めたところ、Table 5に示すように、いずれも高い相関がある。ことに32才以上の人達は.95以上の相関があり16・17才と40代とでは5%水準で有意差がみられる。ま

Table 5 年令別にみた規範意識と実践意識の列位相関

年令	16.17	19-22	23-27	28-31	32-39	40代	50代
rs	.858	.947	.905	.937	.955	.963	.951

Table 6 群別・親子別にみた規範意識と実践意識の列位相関

	L 群		M 群	
	親	子	親	子
rs	.944	.959	.823	.178

た男性群のISV・RSVの相関と女性群のISV・RSVの相関は、それぞれ.937、.923であつた。

ところが親子についてさきのL群・M群のISV・RSVの列位相関を求めると、Table 6のようになり、L群では親子とも相関は高いが、M群では親子間に著しい相違がある。M群の子どもはISV・RSV間に相関があるとは認められない。

L・M群間では、親は5%水準、子どもは1%水準をはるかに下まわる危険率で有意差がある。

この結果から、規範意識あるいはSDがどの人に対しても画一的に実践意識に影響を与えるものでないことが示唆される。このM群の子どもにおいてみられるように実践意識に規範意識が影響しない人たちもあつたことがわかる。

こうして、われわれが行なつてきた研究は、EdwardsがとりあげたSDに関する研究と関連づけられた。年令とか性といった変数は、SDあるいはわれわれの規範意識には支配的な影響を与えないが、これに対して自分の実際の親子関係を記述する際にことに年輩の人において強く影響される。

上述のように、ある群の人たちにはSDが実践意識に影響しないけれども、実践意識を決定する関係系の構造をさらに明らかにしていく必要がある。この研究をまたなくては家族道徳規範がどのように個人に受け入れられているのか、また現実の親子関係がどのような状態であるかに関する知見を得るのは困難である。われわれが実践意識とよんだものが現実の親子関係をどの程度正しく報告しているか、SDによりどの程度歪められているかこの点に関しては方法論的検討がさらに進められなくてはならない。

最後に、本研究では年令・性・親子のちがいをだけとりあげたが、社会経済的基盤の異なる集団について同様の調査を行なう必要があると思われる。

ここで選んだ評価者の社会・経済的・文化的背景はほ

ば一定であつた。しかし、もしここでの評価者の結果封建思想の根強い地域から選んだ評価者の結果と比較してみたらどうだろうか。わが国の伝統的な家族構造の複雑さを考えてみると、評価者選出の地域が親子関係の規範意識に影響するのではないかと予想される。このことについてはおつて研究結果を報告する予定である。

IV 要 約

現代社会において親子関係の規範がどのように人びとに受け入れられているか、どのような親子関係を“よい”と評価しているか、親子関係の現状をどう評価しているかについて調査する目的で、今回は都市に住む人を対象に、一連の調査研究を行なつた。

結果としては、

(1) 規範意識は、年齢・性を変えても、また親であるか子どもであるかにかかわらず、ほとんど変化しなかつた。

(2) 実践意識は、年齢・性を変えると、ある種の親子関係においては変化した。よい親子関係を示すといわれている刺激文章群では年齢差、性差、親と子の差がみられた。

(3) 規範意識と実践意識との関連は、年齢・性・親子により異なり、若い人、男性群の方が年輩の人、女性群よりも規範意識と実践意識とのずれが大きい。文章の型別にみると、年輩の人、女性群では、両意識はほとんど一致しているとさえいえる。

(4) 子どもの規範意識と実践意識のずれが大きいと(あるいは小さいと)、その親の両意識のずれも大きい(小さい)。

年齢別・性別により、親子関係の規範意識は異なるだろうとの常識的予想をよそに、どの年齢層も、男も女も規範的な親子関係の評価はきわめて類似していた。あらかじめ規範意識と実践意識のずれの大きい人たちを選んだ群を除き、どの評価者群においても、両意識間の列位相関は非常に高く、SD はよかれあしかれ実践意識に大きな影響を及ぼしていることが示された。若い世代よりも年輩の人たちの方がSDの影響を受けやすいことが示された。

こうして、親子道徳規範がどのような形で存在し、人びとにどう意識されるか、また、それらは実践意識にどのように影響するか明らかにするためには、このSDという変数を統制することの必要性が示唆された。

付記：本研究は昭和36年度に東京都立大学へ提出された修士論文の一部であり、概要は日本教育心理学会第4

回総会において報告した。研究にあたり、山下俊郎、和田陽平両教授、辻正三助教授に懇切なご指導を賜り、心から感謝するものである。また調査にあつては、東京都立大学の諸先生はじめ、心理学関係の先生がた、科学警察研究所・NHKの方がた、保育学園・東京都立大学学生ならびにご父兄の方がた、同大学附属高校生徒ならびにご父兄各位、高輪台小学校ご父兄各位、南蔵院幼稚園勤務の方がたおよび園児のご父兄各位さらに千葉大学学生の方がたの御協力を得た。ここに深謝する。

また本論文作成につき、都立大学山下俊郎教授、千葉大学助手野口薫氏の多大の御教示を得た。心から御礼申し上げます。

文 献

- (1) Bell, R. Q.: Retrospective attitude studies of parent-child relations. *Child Developm.*, 1958, 29, 323—338.
- (2) Cowen, E. L.: The social desirability of trait descriptive terms: preliminary norms and sex differences. *J. soc. Psychol.*, 1961, 53, 225—233.
- (3) Edwards, A. L.: The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed. *J. appl. Psychol.*, 1953, 37, 90—93.
- (4) Edwards, A. L.: *Manual for the Edwards Personal Preference Schedule*. New York: Psychol. Corp., 1953.
- (5) Edwards, A. L.: *The social desirability variable in personality assessment and research*. New York: Dryden Press, 1957.
- (6) Edwards, A. L.: Social desirability and the descriptive of others. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1959, 59, 434—436.
- (7) Fordyce, W. E.: Social desirability in the MMPI. *J. consult. Psychol.*, 1956, 20, 171—175.
- (8) Fujita, B.: Applicability of EPPS to Nisei. *Psychol. Rep.*, 1957, 3, 518—519.
- (9) Kenny, D. T.: The influence of social desirability on discrepancy measures between real self and ideal self. *J. consult. Psychol.*, 1956, 20, 315—318.
- (10) Klett, C. J.: A study of the EPPS in relation to socio-economic status. Unpublished do-

- ctoral dissertation, Univ. of Washington, 1956.
- (11) Metzger, W.: *Psychologie*, 2 Aufl. Darmstadt: Verlag. v. Dr. Dietrich Steinkopf, 1954.
- (12) 盛永四郎: 心理学概論講義—関係系— 千葉大学文理学部, 1956.
- (13) 盛永四郎・中島信舟・山田晃一・野口薫: 知覚における関係系の実験的研究(I—III), 日本心理学会第22回大会発表, 1958.
- (14) Morinaga, S. & Noguchi, K.: Analysis of factors determining the perceptual judgment of lightness— A study on the system of reference in perception. *J. Coll. of Arts and Sciences*. Chiba Univ., 1960, 3, 41—48.
- (15) 盛永四郎・野口薫: 曲線図形における錯視と残効—知覚における関係系の研究IV。日本心理学会第23回大会発表, 1960.
- (16) 盛永四郎・野口薫・大石明子: 知覚における関係系の研究 VI—重量知覚に及ぼす刺激の提示・判断順位の効果。日本心理学会第26回大会発表, 1962.
- (17) Noguchi, K. & Ohishi, A.: An experimental study on the system of reference in social judgment. *Jap. Psychol. Res.*, 1961, 3, 71—89.
- (18) 津留宏: 家族の心理. 金子書房, 1953.
- (19) 津留宏: 日本の母子関係. 黎明書店, 1958.
- (20) Taylor, J. B.: What do attitude scales measure: the problem of social desirability. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961, 62, 386—390.
- (21) 依田新(編): 家族の心理. 培風館, 1958.

(1962年9月12日原稿受付)

of observation is related with average pattern of perception. (9) The patterns of perception in the control group make clear that much of problem-solving behavior accelerates perceptive differentiation and patterns of perception dependent on the inter-

personal situation. (10) It is suggested that the factor of empathy becomes effective after some experiences in group activity. (11) The patterns of perception seem to be interpretable with normative perception and self behavior-norm.

IDEAL AND REAL EVALUATIONS IN PARENT-CHILD RELATIONSHIP

by

Akiko Ohishi

Tokyo Metropolitan University

Forty-five psychologists were asked to sort 112 items describing various relationships between parents and children, following the method of equal-appearing intervals (9-point-scale on 'better-worse' dimension). From these results 30 items were selected to form a stimulus scale. This scale was administered to urban high school pupils, their parents, and a few others. The Ss were instructed to express the degree of favorableness (i. e., their ideal evaluation) and of endorsement (i. e., their real evaluation) for each item in terms of a 9-point-scale.

1. Ideal evaluations (ISVs) did not differ with age and sex of the Ss irrespective of whether they were parents or children.

2. Real evaluations (RSVs) differed with age and sex of the Ss in certain cases of parent-child relationship: remarkable differences were found with age, sex and parent-child relationship in a set of

items representing 'better' parent-child relationship.

3. Relation between ISVs and RSVs varied with age, sex, and parent-child relationship: discrepancy between ISVs and RSVs was larger in younger and male groups than in older and female groups; in the latter, ISVs and RSVs were almost consistent with each other.

4. When a child had a larger (or smaller) discrepancy between ISVs and RSVs, his parent also had a larger (or smaller) one.

5. Rank correlations between ISVs and RSVs were generally high in almost all groups.

To interpret the above results the concept of "social desirability" was applied for: older groups were much more influenced by social desirability than the younger. Thus the control of the social desirability variable was found to be necessary for establishing the methodology of studying parent-child relationship.